



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3375号 2016.11.30 発行

障害者虐待43件 県内15年度 性的被害、暴力の悪質事例も確認 [熊本県]

西日本新聞 2016年11月30日

県は、障害者福祉施設などで2015年度、障害者に対する虐待43件（被害者59人）を確認したと発表した。虐待の実態を細かく把握するため、賃金不払いなど「経済的虐待」の認定基準を広げたこともあり、14年度の30件（同68人）を上回った。性的虐待や暴力、暴言を繰り返すなど悪質な事例も確認されている。

15年度は県や市町村への虐待に関する相談や通報も124件に上り、14年度の86件から大幅に増加した。虐待43件のうち、親など養護者が虐待をしていた事例が19件（被害者19人）、福祉施設職員などによる虐待が7件（同12人）、施設運営者や障害者を雇用する事業主による事例が17件（同28人）だった。

虐待内容は、たたくなどの身体的虐待14件、暴言などの心理的虐待9件、賃金不払いなど経済的虐待23件などとなっており、複数の虐待を同時に受けていた被害事例もあった。

県は15年8月、職員が利用者をたたいたり暴言を繰り返したりしていた天草市の知的障害者施設を行政指導。熊本市は同12月、施設運営者の元理事が入所者に性的虐待をしていたとして市内の知的障害者施設を1年間の入居者新規受け入れ停止の行政処分をした。

調査結果は、障害者虐待防止法に基づき毎年公表。虐待が確認された施設には行政指導や行政処分をするほか、改善計画の策定と実行を義務づけている。

「障害はできないではなく、できること」メッセージ 「able エイブル」上映 札幌、映画鑑賞で知的障害に理解深める

産経新聞 2016年11月29日



「able エイブル」の上映会でチケットを受け取るダウン症児の親と子で構成する北海道小鳩会札幌分会のメンバー＝28日、札幌市（杉浦美香撮影）

映画の鑑賞を通じて知的発達障害への理解を深めようと、ドキュメンタリー映画「able エイブル」の上映会が28日、札幌市北区の札幌エルプラザで開かれ、参加した約150人が熱心に見入った。



映画は自閉症とダウン症の日本人少年2人が米国でのホームステイ生活を通し、周囲の人々と信頼関係を築いていく姿を描いている。

上映会では、「ableの会」の剣持睦子さんが「知的障害はdisable（できない）ではなく、able（できる）であることを知ってほしい」と挨拶。鑑賞した札幌市の中学1年、中静淳（あつし）さん（13）は「どんな人もがんばればいろんなことができる

のだと思った。3歳年上の兄が知的障害ですが、同じ。障害も語学が通じないことも関係ないのでね」と感動した様子だった。

チケットを受け取る役は、ダウン症児の親と子で構成する北海道小鳩会札幌分会の足助由希さん（19）と三好宏樹さん（28）、小野寺郁音（あやね）さん（21）が担当。就労継続支援施設「アラジン」に通所している三好さんは「自分が好きなことを広げていけるのは楽しい。僕も映画のダウン症の少年、元（げん）君のように海外で生活してみたい。アルペンスキーをしているのでスキー留学がしたい」と目を輝かせた。三好さんは平成17年に長野で開催された知的障害者のスポーツ大会「スペシャルオリンピックス冬季世界大会」のトーチ（聖火）ランナーを務めた。

映画は「a b l eの会」代表で、元首相夫人の細川佳代子さんが製作総指揮。毎日映画コンクール記録文化映画賞を受賞している。

東京パラリンピックに向けて伝えたい 妻が聴覚障害 歌のユニット「アツキヨ」

東京新聞 2016年11月29日
ライブをするアツシさん（左）とキヨさん＝東京都足立区の千寿小で

聴覚障害がある妻と、健常者の夫の歌のユニット「アツキヨ」が、二〇二〇年東京パラリンピックに向け、障害への理解を深めてもらおうと、東京都内の小中学校で講演ライブ活動を続けている。夫の歌やギターに合わせ、妻が手話を取り入れた振り付けで踊り、歌う。子供たちに伝えたいのは「夢をあきらめないで」という思いだ。（石井敬）



「両手の人さし指を向かい合わせて曲げてください。これが手話の『あいさつ』です」。東京都足立区千寿小学校で先日開かれたライブ。キヨさん＝佐々木清美（39）＝と舞台上に並んで立った夫のアツシさん＝厚（41）＝が、全校児童約五百人に語りかけた。「ごあいさつ」という歌に合わせ、子供たちが元気よく手話を操る。

山形県出身のキヨさんは三歳になる前に重い難聴と診断された。高機能補聴器の助けで、やっと音が聞こえる。自分の声の音程も分からないが、幼い頃に松田聖子をテレビで見えて以来、歌手になるのが夢だった。

二人の出会いは二〇〇一年。上京して会社員生活を送りながら、音楽のパートナーを探していたキヨさんは、足立区の北千住駅前でも偶然、アツシさんが歌っているところを見かけた。フリーターをしながら歌手を目指していたアツシさん。その「響きのある歌声」が「私にも聴き取りやすい」と思った。デュオを組みたいと頼み、手話をもとに独自に考案した振り付け「サインボーカル」を担当することになった。二人の姿は話題となり、六枚のCDを出した。高校生の英語の教科書にも取り上げられた。

しかし、次第に活動が減り、アツシさんは一二年末に所属事務所を辞めた。それから半年余り。会わずにいて、お互いの大切さに気付いた二人は結婚。昨年夏には長女が生まれた。「歌の音」という言葉から「かのん」と名付けた。キヨさんには、赤ちゃんの夜泣きの声が聞こえない。タクシー運転手のアツシさんが育児休暇を取得し、子育てを支える。

二人は昨年からは荒川区と足立区の小中学校などで、東京パラリンピックに向けて障害者理解などを進める授業に呼ばれ、講演ライブを続けている。これまで十五校以上を回った。

<♪きっとだれもが／奇跡を起こす力をもってるよ／あきらめちゃダメさ>。ライブで必ず歌う曲「K i s e k i～もうすぐ起こる奇跡を信じて」の歌詞だ。「今までの『あきらめなければなんだってできる』というテーマに加え、夫婦として『家族愛』や『絆』の大切さも伝えていきたい」とアツシさん。キヨさんは「もっと都内全域の学校を訪ねていきたい」と意欲的だ。「東京五輪・パラリンピックの開会式や閉会式で歌えたらいいな。今まで出会ったすべての人に、音楽を通して恩返しをしたい」

入所施設「ちゅうりっぷの家」 江北町で落成式、完成祝う

佐賀新聞 2016年11月29日



落成した障害者用グループホーム兼ショートステイ「ちゅうりっぷの家」＝江北町

■仲間との新生活に期待

障害者が生活するグループホーム兼ショートステイ「ちゅうりっぷの家」が23日、落成した。保護者が亡くなるなど身寄りをなくした人が、仲間とともに規則正しい生活を送れる新たな居場所となる。同日あった落成式で大勢が完成を祝う

とともに、助け合う社会の実現に向けて思いを新たにした。

施設は木造平屋建て約120坪。個室7室とショートステイ室2室を備えた。利用料は食費・光熱費込みで月額5万円。花見や七夕、クリスマスなど季節ごとの行事もある。11月1日から入所を開始しており、すでに個室は6室が埋まっているという。同町内で就労継続支援B型事業所（福祉作業所）を運営するNPO「ちゅうりっぷのうた」（本村容子理事長）が設立した。

式で本村理事長は、自身が教職員だった頃、障害児学級に通う子どもたちに触れ、卒業後の居場所としてNPO設立を決意した経緯などを話した。「（福祉作業所の利用者も）言いはしないが、私たちに訴えていた。人間らしい生活をどこかでサポートしなければと思った」とグループホームへの思いを語り、「時々、立ち寄って声の一つもかけてくれば」と来場者に語った。施設の問い合わせは同法人、電話 0952（86）4520。

南伊豆町・杉並区 自治体連携の特養 着工

読売新聞 2016年11月30日

◆2018年開所 消費増、待機解消に期待

南伊豆町と東京都杉並区による自治体連携としては全国初となる特別養護老人ホーム「エクレンシア南伊豆」（仮称）が29日、同町加納で着工した。町では雇用創出や消費の増加、区では特養待機者の解消などのメリットがあり、2018年1月の開所を目指している。（北村勤）



工事の安全を願い、くわ入れをする梓友会の川島理事長（29日、南伊豆町加納で）

◆福祉センター 隣接地に

同町によると、施設は木造一部鉄筋コンクリート造り3階建て。町有地の旧中央公民館跡約6620平方メートルに整備し、社会福祉法人「梓友会」（下田市、川島優幸理事長）が運営する。

定員90人のうち、区民に50人、地元住民に40人程度を振り分け、ショートステイ（定員10人）、デイサービス（同25人）も併設。建物には地域交流スペースも設置される。総工費（消費税は除く）は県、杉並区の補助を含む16億4000万円。

これに合わせ、南伊豆町は、健康増進や福祉サービスの向上を目的に約4億円をかけて、地域包括支援センターや社会福祉協議会などが入る健康福祉センターを隣接地に整備する予定だ。

国民健康保険制度では、他自治体から移り住んだ入居者の医療費を転居前に住んでいた自治体が負担する「住所地特例」がある。

県によると、従来、74歳まで認められ、後期高齢者医療保険制度に切り替わる75歳を超えると適用されなかったが、法改正で18年度から75歳以上の利用者にも適用されることになり、杉並区からの利用者を受け入れても町の負担は増えることはなくなったと

いう。

町は、特養の開所によって70～80人の雇用増と年間約2億円の経済効果を見込む。一方、区の特養待機者は今年10月末現在で約1300人おり、来年度から3年間で町の50床を含む550床を増やす計画だ。また、区が1974年、町に南伊豆健康学園を開設して以来、住民同士の交流が深まっており、区が13年度に特養待機者約1600人を対象に実施したアンケートでは、町の施設に「入所したい」「入所を検討する」と答えた区民は回答者の3割（約240人）に上ったという。

起工式には関係者約60人が出席。梅本和熙町長は「ここまで6年間かかった。健康福祉センターと連携して重要な社会資源として力を発揮してほしい」とあいさつ。杉並区の森山光雄保健福祉部参事は、式後の取材に対し、「南伊豆町の施設は、区の増床計画の一環として大きな役割を果たすことになる」と話した。

帝王切開で障害、原告と日赤和解 高松高裁

朝日新聞 2016年11月30日

帝王切開で早産になったために障害が残ったとして、2003年に生まれた男児とその両親が、高松赤十字病院を運営する日本赤十字社（東京都）に損害賠償を求めた訴訟が高松高裁で28日、和解した。

昨年4月の一審判決で高松地裁は、三つ子の胎児の1人が死亡したため、高松赤十字病院の医師が帝王切開で残る2人を予定日の約2カ月前に出産させたことで、男児に介護が必要な障害が残ったとする原告の主張を認め、日本赤十字社に約2億1千万円の支払いを命じた。日赤側が控訴していた。

原告、被告とも和解内容は明らかにしていない。高松赤十字病院の網谷良一院長は和解に至った経緯として「一審判決は産科医療の現場に混乱をもたらすものだったが、高裁の和解勧告でそれが是正された」とコメントを出した。原告側代理人は「勧告が納得できるものなので和解に至った。長期にわたり話を聞いてくれた裁判所に感謝している」と話した。



授産所品の紙、ブランド化 浜松2施設、障害者の賃金アップへ

静岡新聞 2016年11月30日

ブランド化した授産品をPRする平沢さん（右）と三井さん＝浜松市東区の四季彩堂

牛乳パックなどから紙を作っている浜松市北区の「三ヶ日たちばな授産所」と同市西区の生活介護事業所「工房ゆう」が授産品のブランド化に取り組んでいる。民間企業と連携し、商品の付加価値を高め障害者の賃金アップを目指す。

両施設はこれまで、紙の売り上げが少なく十分な工賃を払えなかった。紙の価値を上げるため、課題の販売力や認知度を解決しようと、雑貨店「四季彩堂」（同市東区）に協力を依頼。三井恵子取締役のアドバイスを受けながら、同市の特色を生かした商品開発に取り

組んだ。

コラボの題材に選んだのは織物「遠州綿つむぎ」。同店で余った織物の切れ端をちりばめた和紙やポチ袋を作り、「クリエーション・リ・ペーパー」と紙のブランド名を付け、市内の四季彩堂で販売を始めた。25日には遠州綿つむぎを使ったメモ帳を新たに同店に納品。紙一枚一枚の触り心地が異なる手作り感のある出来栄えになった。

三ヶ日たちばな授産所の平沢文彦施設長は「授産品は作り手のぬくもりが魅力。ブランド化を通じて障害者の可能性を広げたい」と話した。

【知恵の経営】障害児が日本一多い幼稚園

Sankeibiz 2016年11月30日

□法政大学大学院政策創造研究科教授、アタックグループ顧問・坂本光司

小田急線柿生駅からタクシーで10分ほど走った川崎市麻生区の住宅街の一角に、柿の実学園が経営する「柿の実幼稚園」がある。敷地面積は広大で約1万平方メートル、園児はなんと1500人、先生も200人と、全国最大規模である。

規模もさることながら、特筆すべきは、多様な障害のある園児がなんと約200人も在園している点だ。ほかにもさまざまな理由で障害者手帳を持たない障害児が約100人と、合計では300人もいる。つまり、園児の20%、5人に1人は障害児である。障害児の在園している幼稚園は少なからずあるが、柿の実幼稚園こそ、間違いなく日本一の幼稚園である。

障害児も軽度や中度の障害のある園児たちもいるが、中には毎日、頻繁に吸引が必要な園児や全盲、自閉症、さらには横たわったまま移動せざるを得ない園児も多数いる。いやはや素晴らしい幼稚園である。

柿の実幼稚園の開園は、今から55年前の1962年、住職だった現園長の義理の父が、地域の要望を受け現在地でスタートした。開園時の幼稚園の規模は、約200人定員と普通の規模で、障害児も現在のように多くいる園ではなかった。

しかし、開園以来の熱心な保育と良い環境が、保護者や園児の支持を集め、うわさを聞きつけた全国からの入園希望が相次ぎ、規模を拡大せざるを得なくなり現在にいたっている。

障害児の入園は「みんなちがって、みんないい…」というスローガンの下、開園当初から自然に行っていたが、今日のように多数の園児を預かるようになったのは、現園長の小島澄人氏の考えが大きい。

もともと小島園長は神父を志したほどやさしい人だったが、入園希望者の中でどこの幼稚園でも入園を認められない重度の障害児も少なからずおり、「差別はおかしい…、正しくない…」と周囲の心配もあったが積極的に受け入れに動いた。

先日、柿の実学園の小島哲史理事長から心温まるエピソードを聞くことができた。その一つは、大阪市に住む、障害児の母親の話だった。ある年の入園相談会の日、憔悴（しょうすい）しきった表情の一人の母親が、重度の障害のあるわが子の入園相談に来たときの話だ。母親が言うには「この園に来るまで29カ所を回ったが、すべて断られ、30カ所目です。どうか入園を許可してください…」と、頭を地べたになすりつけるように嘆願をした。

小島園長はその話にじっと耳を傾け、「お母さん、わかりました。心配いりません…、この幼稚園で引き受けますよ…。大変でしたね…」と手を取りながら、ねぎらいの言葉をかけた。「その瞬間、母親の目から大粒の涙があふれ出ていました…」と話してくれた。

その後、園児と両親は入園を機に大阪から川崎に居を移したそうだ。こうした正しい・心優しい幼稚園が全国に多数誕生すれば、わが国の未来は明るい。

障害児の放課後ケア充実へ 一関に新施設

岩手日報 2016年11月30日

12月1日に開所する障害児のための放課後ケア施設「Harmony一関」



障害のある子どもを対象とした放課後ケア施設「Harmony一関」（高橋由似施設長）が12月1日、一関市山目に開所する。一般社団法人「青葉の杜（もり）」（仙台市若林区、藤本和久代表理事）が本県に初進出し、運営する。高橋施設長は「障害に対する壁をなくし、地域に溶け込み、本人や保護者の一番の理解者でありたい」と意気込みを語る。

対象は特別支援学校や特別支援学級に通う小学生から高校生までの10～15人程度。施設は相談室や指導訓練室、ホールやキッチンなどがあり、平屋建ての54・86平方メートル。家庭的な雰囲気の中で、ダウン症や自閉症、多動性障害などの障害がある子どもたちが放課後に過ごす場所を提供する。

児童発達支援管理責任者の高橋施設長や教員免許、保育士資格などを持つ職員ら7人が対応する。利用時間は基本的に平日の下校時から午後6時まで。土曜や祝日、長期休暇の利用や送迎は希望者に応じて行う。

開所後の利用や職員採用についても相談できる。問い合わせはHarmony一関(0191・88・9033)へ。

木屋平で薬局運営のNPO 阿波市吉野に障害児施設 徳島新聞 2016年11月30日



NPO法人・山の薬剤師たちが開設する障害児通所支援センター「たなごころ吉野」＝阿波市吉野町柿原

美馬市木屋平地区で唯一の薬局・こやだいら薬局を運営するNPO法人「山の薬剤師たち」は12月1日、阿波市吉野町柿原に障害児通所支援センター「たなごころ吉野」をオープンさせる。「山の薬剤師たち」が薬局以外の施設を開くのは2カ所目で、阿波市東部で手薄だった障害児支援に貢献するとともに、法人の収益増につなげ、経営が厳しい薬局の運営を支える。

センターは木造2階建ての1階95平方メートルを活用し、学習室や訓練室などを備える。空き家を改修し、家庭菜園ができる庭もある。保育士ら専属の職員4人が放課後などに障害児を預かり、学習支援などを行う。対象は5～18歳で1日の定員は10人。

NPOは2010年、約20年間薬局がなかった木屋平地区に薬局を開設。しかし、人口が約670人の木屋平地区では1日に受け付ける処方せんが少なく、薬局の運営は赤字が続いている。収益の安定化に向け、デイサービスや障害者就労支援などを組み合わせた複合福祉施設を13年、鳴門市に設けていた。

さらに経営を強化させるため新施設の設置を目指し、障害児支援施設がない阿波市東部の吉野町でセンターの開設を決めた。

瀬川正昭理事長(63)＝徳島文理大教授、上板町西分＝は「阿波市周辺の障害児の支援体制を充実させるとともに、木屋平で事業が続けられるよう、経営の足腰を強めていきたい」と話している。

特産の花崗岩ダイヤ「庵治石」で新春の干支を…高松市で酉の置物発売



産経新聞 2016年11月30日
来年の干支「酉」が描かれた庵治石製の置物など(純愛の聖地庵治・観光交流館提供)

高級石材の産地として知られる高松市庵治(あじ)町の魅力を発信している「純愛の聖地庵治・観光交流館」は、特産の庵治石に来年の干支「酉(とり)」をデザインした置物を発売した。

花崗(かこう)岩のダイヤともいわれる庵治石をさまざまな形で発信し認知度を高めようと、地元の石材職人らが企画。石材にレーザー彫刻で絵柄をあしらい、磨きや梱包は地元の障害者施設に委託した。

置物は円形の「庵治石ゆらゆら」の中(直径8センチ、3800円)と小(同5センチ、2600円)、円形で下部がアーチ状になったタイプ(同10センチ、7100円)の3種類。そのほかペーパーウエートクリップ(同5センチ、1500円)も用意した。

同館の滝内志保館長は「庵治石のつるつるとした光沢や質感を置物で手軽に楽しんでほしい」とPRしている。問い合わせは同館（(電) 087・871・1700）。

介護福祉はクリエイティブな仕事 障がい者の就労支援事業「恋する豚研究所」

産経新聞 2016年11月30日



介護・福祉問題の、クリエイティブな解決方法

医療と介護の連携の重要性を感じ、介護業界の若手と模索を続ける家庭医の田中公孝先生。田中先生が運営メンバーとして関わっている HEISEI KAIGO LEADERS 主催のイベント「PRESENT」があります。これは、団塊の世代が後期高齢者を迎える 2025 年、介護福祉を担う

今の 20 代はどうあるべきかを考える学びの場です。今回の「PRESENT」では、福祉の新しい形を探るべく、株式会社恋する豚研究所代表の飯田大輔さんをゲストに、福祉のあり方を学び考えました。

飯田大輔さんは 2001 年、母親急逝のため設立半ばとなってしまった法人を引き継ぎ、社会福祉法人福祉楽団の実務を任されました。特別養護老人ホームの相談員や施設長を務め、2012 年に障がい者の就労支援を行う「恋する豚研究所」を設立。新たに里山保護と障がい者や高齢者の活躍の場の創出に取り組んでいます。

◆介護福祉はクリエイティブな仕事

講演の前半では活動の原点と、これまで取り組んだ事例を紹介していただきました。

「社会福祉法人を設立するにあたり、約 200 件の福祉施設を回りました。すると、裸の老人がお風呂の前に並ばされていたり、普通の人でも覚えられないような複雑な操作が必要なエレベーターが設置されていたりするのを目の当たりにし、『福祉の世界ってこんなのでいいのか?』とすごく疑問に感じました。その一方で、課題山積であるからこそ多くの可能性があると感じました」

また、介護士が同じように接していても決して同じような結果にならない。その一回性である介護の仕事を、非常にクリエイティブに感じたそうです。そんな考えが根底にあるからこそ、多くの方が視察に訪れるような取り組みが可能となっているのでしょう。

◆障がい者の就労支援事業「恋する豚研究所」（千葉県香取市）

社会福祉法人として活動している中で、障がい者の働く場所がないという話を多く聞いた飯田さん。詳しく調べると働く能力のある障がい者が、月給 1 万円程度に留め置かれていることを知り、2012 年に「恋する豚研究所」を設立しました。障がい者の賃金を 10 万円に引き上げるべく、社会福祉法人理事長で飯田さんの伯父にあたる在田正則さんの農場で育てられた豚を活用し、製造販売とレストランの運営をしています。

工場内では精肉作業、パッケージ詰め、シール貼等を、障がい者と健常者がともにを行っています。肉の余計な脂をそぎ落としたり形を整えたりする作業は精神に障がいのある人に任せており、大きな包丁を用いての作業なので、精神障がい者施設の方が視察に来ると、非常に驚かれるとのことでした。

◆若者も集う高齢者施設「多古新町ハウス」（千葉県多古町）

高齢者や障がいのある子どものデイサービス、ショートステイ、訪問介護などのある長屋と広い庭、そして隣に寺子屋を併設した「多古新町ハウス」。デイサービスを利用するお年寄りや、特にデイサービスを利用しているわけではないけれどもおしゃべりに来るお年寄り、広い庭で遊ぶ小さな子どもたち、寺子屋には学校帰りの中高生が入れ代わり立ち代わり訪れる、そんな空間です。

寺子屋からはデイサービスが見えますし、寺子屋にはお手洗いがないので、デイサービスのものを利用します。だからこそ、自然と若者と高齢者の交流が生まれます。

たまたま夜に寺子屋の鍵を閉めずにいたら、深夜、専門学校生たちが集まって勉強をし

ていたところから、寺子屋は 24 時間無料開放にしているそうです。また、「福祉施設」という看板を掲げていないために泊まれる場所と思った高校の先生が「下宿先として使わせてほしい」と尋ねてきて、ショートステイ用の 1 部屋を高校球児の下宿部屋として提供することにしたそうです。

◆ニーズとリソースを知り、先に概念を作らない

これらの事例を紹介した飯田さんは「何が大事かと言うと、概念を先に作らないことです。『障がい者』というレッテルを先に貼らない。恋する豚研究所は、『就労継続支援 A 型施設』と建物のどこにも書いていません。多古新町ハウスも『福祉施設』と書いていません。老人ホームというラベリングをするから、『老人ホーム』になってしまうんです」と、おっしゃっていました。

そして、自分の身の回りに必ずニーズとリソースがあるので、それを組み合わせて経営的にも持続可能なものにしていく視点が重要とのことでした。参加者は自分の身の回りのリソースで、まだ活用されていないものを各自考え、数人ごとのグループで共有しました。

その後、2015 年から始まったプロジェクトについてもお話いただきました。

◆地域循環型エネルギーの流れを作る「里山プロジェクト」(千葉県香取市)

日本の国土のうちの 70%が山、12%が農地。この 8 割の土地が荒れてきていることが問題となってきています。原因は、林業従事者の高齢化、材木価格の低下。そこで飯田さんは、障がい者の働く場を里山にも広げる試みを始めました。自伐型林業と呼ばれる間伐作業の工程を細かく分解して、各作業に必要な道具を作業や、どこでどのような安全点検が必要かを全て見える化することで、障がい者や、認知症の方でもできる作業が生まれると考えています。

「林業や農業という端から難しいと思ってしまうと思いますが、作業を分解して見える化する。福祉の世界では「構造化」と言いますが、そうすることで『難しい』という心のバリアをなくしてあげられると思うのです」

また林業従事者側には「本当に薪が売れるのか」という心配が出てきます。そこでまきボイラーを福祉施設に導入してもらい、一定量の需要を確保したいと考えています。このように需要と供給のバランスが取れている環境を整備することで、里山を永続的にきれいに保ち、経営も持続する仕組みが成り立ちます。

「誰が一番喜ぶかと言うと、地域の高齢者です。地域の心配事を一つひとつ紐解いて、取り除いていってあげることが、地域に関わるうえで大事だと思っています。それが僕たちの役割です」

◆地域のニーズは、地域で解決する

概念を先に作らず、まずは身の回りにあるニーズを受ける。そして自分の身の回りにあるもので解決できそうであれば解決を試みる。その繰り返しを飯田さんは「コミュニティ・イン」と呼んでいました。

「PRESENT」の参加者は、意欲ある若手です。医療介護福祉の分野において、外に目を向け多くのことを学び実践しようとしています。そんな参加者が、一旦立ち止まり、身の回りを捉え直す良い機会になったのではないのでしょうか。

【医師プロフィール】田中 公孝(家庭医) 2009 年滋賀医科大学医学部卒業。2011 年滋賀医科大学医学部附属病院にて初期臨床研修修了。2015 年医療福祉生協連家庭医療学開発センター(CFMD)の家庭医療後期研修修了後、引き続き家庭医として診療に従事。医療介護業界のソーシャルデザインを目指し、「HEISEI KAIGO LEADERS」運営メンバーに参加。イベント企画、ファシリテーターとして活躍中。

